夢想兵衛胡蝶物語後編

上四

へ13
3096
8

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之四

東都　曲亭馬琴戯編

歡樂郷

（この段殊ふ老実ありて。全部の大要を述べ。閲するものハ欲ぶべし。）

飲びと求るものハ人の阿るを好ミ。楽を求るものハ教の長を忘ハど。夫教ハ長べくぞ。且一と長バその財竭く。欲ハ従ふ事べくば。且一を従ふ事べくば。禍を惹く。志ハ満べくば。且一を満ぶバ倍ふ諄る。楽ハ極むべくば。且一を極むれバ。哀を来る。教をバ省くべ。欲ハ寡かるべ。志ハ艱くべ。楽をバ忘るべ。人その乐を乐めべ。その乐ミも竭るとあり。楽を竭て哀を来ぶバ。乐ざるふまじとは。とかく出うくる巻志兵衛ハ哀傷郷ふて。ものハざも。怪ノ紀少年ふ説破られ。酔るぶ。醒るぶ。亦彼紙鳶ふうち乎ふ。て。喜怒哀楽の國境。盛衰山とうち哉せバ。別ふ一ッの世界あり。名つけて歓乐郷といふ。哀傷々の隣國ふて。衰山ふ背き。盛山ふ向ひ。その

昭和九年
七月二四日
購求

門 へ13
新 3096
巻 8

山水世ふ勝まして。好風好景比なく。彼仁者ハ山を楽ミ。智者ハ水を楽むといへ。肱を曲て枕とし。楽む人もこゝふあり。されバ國王の楽ミハ賢を用ひ。佞を遠ざけ。色を好まず。酒を嗜まず。仁ふ厚くして忘まこゝろ如く。民を視ること子の如く。諫めを用ゐて大海の百川を容るゝごとく。恩を施さゝと甘雨の万物を育るごとく。只仁政と布るこゝ。牙の楽ミとしてハ國治りて民安く。風ハ條を鳴らさず。雨ハ壤を壞さず。五穀豊稔。穂ふ穂をさゝして。酷吏なく。賊民なく。耕さるものハ畝を讓り。路ゆくものハ道を讓り。人の犯さゝるハ慈愛。人の子たるハ孝ごとく。兄弟ハ莫逆なく。妻子ハ和合し。親族ハ睦しく。朋友ハ信あり。市賈ハ貳價せず。購るものも又直減らず。尻を待バぬ安札の職人なけれバ當ふ備をなる。拂ふの檀那ふ。風俗なくして質朴なるこゝ。富ハ貪なる恵紛あるハ不祥をあハれ。健なるハ病のと双抱し。義ふ仗てハ貨を惜まず。身を殺しても。仁をなさんとこゝろがけ。おのく陰徳を積むことを楽とする友よ。遠きも近きも風を臨て。隣國ハ臣附。蛮貊ハ来貢る。獣ふ麒麟あり。鳥ふ鳳凰あり。木ふ連理あり。草ふ霊芝あり。甲冑ハ兵庫ふ積ども。軍せしもなく。獄舎ハ僅ふ形をとゞめて。罪人ふえて一人もなし。是を内聖外王の楽といふなり。されバ又大臣の政を執るこゝハ。理乱の道をよく考へて。数り慢ることなく。むつかしく賄ふ箸を擲て。せしく士ふくゞろ。結びくゞける髪を握りて。叮嚀ふ賢を迎へ。四時の気候をこゝろ。農業をすゝめ。蚕飼をよくゝ。ぶ。その君を喜ん。辭ふいさゝ紙ゆつて。ふとこゝ。下の三司百官。職を守りて。私なく。みなその位を安くして。業を楽ざるものなけれバ。貴賤さもしく。大勝日の修羅道なく。年内よろ顔色和ぶ。備ることのハ時をよぶくと。叶方ハ。驟雨の番傘。霄闇の挑灯も。貸下

されふるるものゝ。殘あるものハ殘を散じ。殘を積ざるを楽とし。足ざるものハ油断なく挿て人をうらみさゝぬを楽とす。主ハ家隷の能不能をえらゝで。それ〳〵ふ憐を艱ハを楽とす。給張の女ハ紡を楽とせゞ。犯ハ子ハ教へ道ふれ。善人ふまゝとおゞる紙楽とゝ。義服を被せ拵を習ひ。花ふ裝せ浮気ふまゝて。物貝清ふつまゝ出るを楽とせゞ。子ハ親同胞ふ孝愽を尽して。犯同胞ふ敬る紙楽をとゝて。或ハ友を集め。或ハ夜拵ひふ出るを楽とせゞ。婦ハ夫ふ舞眉て。操節正しく。よく内を治るを楽とゝて。衣裳掻ふ殘を費し。女兒の藪入ふ假托て。寄舞伎設よゆくを楽とせゞ。朋輩ハ隔なく。断金の交ひて。練練らくを楽とする友ふ。犯ハ人ハ神主ハ物穂ろ妻さを楽とせゞ。氏子の爲ふ丹精を抽て。その福を祈るを楽とゝて。初穂妻ろ。和尚ハ又布施の妻さを楽とせゞ。檀那の爲ふ。読経する楽とする多ふものゝ。ふ布施妻ろ。医師ハ病家の貪福。茶礼の経重とえゝ。方とえゝ。茶を擇ゝ。病を愈とゝ楽とする多ふ。五節供ふ茶礼妻ろ。凡文武の師ハ。ものの二季の謝礼を受るを楽とせゞ。教育して道を作く。業を授るを楽とする多ふ。名実四海ふ溢て。ざるものゝ。弟子ハその藝ふ拵びて。才ふ誇るを楽とせゞ。ひい其言行を慎ゝ。師を敬ひ。化を誹らざるを楽とせゞ。その楽ひ所。ものくもほろゝ。とゝ。五常の道ふ違ふものゝければ。楽をあまろうありて。衰ゝなく。喪びあまろうあるとも。憂みゝ。かゝる國ふ生ざる畜生ハ。畜生相衰の楽とあれども。馬ハ轡を外し。跨るを楽とせゞ。牛ハ角をふろまして。人を突を楽とまくの駄賃をとゝるを楽とゝ。牛ハ角をふろまして。人を突を楽とせゞ。車をひ犯て山阪を上下し。主の爲ふ猟りを楽ゝ。犬ハ門を戍て賊を防

を乎として友犬と嚼合ひ。人ハ咬ひつくを乎とせざど。猫ハ鼠を捕とを乎
として魚肉を盗む。戾の中へ糞をするとを乎とせざど。鷄ハ晨を報げ人
を呼んをを乎として。蹴あゝを乎とせざど。烏ハ反哺の孝を尽さを紙
乎として稼物を食ふを乎とせざど。猛獸。悪魚。毒虫ハ至るまゝ。物を
傷らざるを乎とする有ふ。虎ハ猫の如く人ハ馴る。狼ハ狗の如く人ハ押さ。
鰐ハ守宮のまゝふるを乎。鮫ハ溷沙魚のまゝふるを乎。蛇蛇ハ蚯蚓のまゝ
ふるをれ。蜂ハ虻ハまゝふるもおそれらを乎ざ。蚤蚊ハ人の身ハ著ざ。國ハ悪木
毒艸あけを乎。人ハ悪ハ不善者ハ一。愛恵兵衛ハ右の光景ハ直と
呆るまゝふるのをるれば。頻ふるまゝ恥じく。もりひさや世界ハ。かくのごとく
國あらんとハ。現人の世の楽をハ。数をまゝ慾ハ耽り。不善をするまゝ
もまゝふるふこの國の乎をハ。彼竟舜のたのをとふとまゝふるべき。

ふるを乎とまゝふるべもまゝふるまゝ。半生の非をまゝふるぬ。彼竟の國へ入て。ひつゝく
の純まゝや。無為ふるまゝて治るまゝハ聖王の德ふまゝて。教ざまゝて道あるまゝ。
仁人の恩澤ふるまゝ。嗚呼あやまゝて。悔てまゝと屁放まゝし後ハ尻をまゝ舐め。
墮まゝる後ハ高をまゝを乎。今ハ昔の光景を家土産ふまゝて立まゝらめと
ひまゝごちて立在ふまゝ。衣冠正まゝ官人。三四人出まゝふまゝて愛恵兵衛
ふまゝち對ひ。没ハ彼日本國より拉歴まゝる。愛想とやまゝんと吸まゝて口才き
白徒ふる欲まゝ。國ハ信義をまゝて。楽をまゝとせざるまゝのまゝ。さるふまゝて遠方
の客を労ひ。りまゝさまゝらんとハ。ごまゝ王食田をまゝのまゝて耕さまゝ。やまゝる
後らんとハまゝのまゝハ。舶ハ帆ふ。穫を齎まゝて。故國へ送まゝ後らまゝ。
まゝふるハ没ハ。軽才ふまゝて。辯を好まゝ。人の非をまゝつまゝは。ごまゝ王豫て待まゝ
乎を。ふまゝて。糸を乎と仰まゝる。ごまゝ。糸を乎ごまゝふまゝ声の物やまゝまゝふまゝ吹ゆを

ども。痩りつ足ふ踏こたへ。愛表兵衛ハ忽地ふ。顔色土のごとく変じ。
只阿唯ことを惑ひ。慌ていそぐつ。王城へ誘引もく程ふ。城門三つ。
ことごとふ門下ふ器械とちりぬ。護るの礼儀正しくしてものづから上国乃風
あり。既ふ正殿ことちぬ。宮舎ハ。檜皮葺ふて門扇ふ漆せば。
悦ふ画ふ。鴟尾ふ彫せて。布承塵と。倚簾簟ふけ。ことひの外ふ
つくろひ。上代の容ふ。斉く整ふて。犯ことぐらもあらぬ。
ふ感涙と拭つ。ことといふ。王ふ。愛表兵衛ハいよ〳〵ふ。
ことそふ。この聖徳を感佩し。彼官人ふが後方ふ跟きて。歓楽殿へ
案ふ。官人ふハ恭しく。愛表兵衛を招て案れるを。
あげふ。かて三公百官ふ。坐して。ものく袖を列。儀〻堂〻ふ光景ハ威
あつて。国ふ猛ふ。時ふ衣冠の人階下ふ臨ふ。遠来の客ことと

よ
召び入ふ。愛表兵衛ハ。背ふ汗して。沙も進まず。警蹕の声とともふ。
国王。屏風の背ふ。後ふ出て。高坐ふ著御あり。左右ふ仰ぎて愛表
兵衛を。玉坐ちく召のぶ。ものふいとも恐くて。うち仰ぎぬ。龍顔を
拝して。ふ勝ぬ頓首して。聖王孫がつくハ。汝の罪を問ひ。
とおうせ。ふ。国王微笑て。まづ。ことふ吐せをのひ。さて寓ハ。
問廣博ふて。ものも老荘を好ふ。四徳八紘を逍遥して。遊ひを釈ふ。
ものふ。よく教喩ことをのん。その名を学ふ久しく。かくて。又。ふ。
歴ことふ。実ふ幸ひ甚しといへべ。那人ハ先生一言を惜まずして。教えの
と宣へば。愛表兵衛ハ。ものく羞いりて。一言半句も。ことをまつらぬ。三司
百官笑ひを忍び。速ふ勅答あるべ。失敬なり。と促せば。国王亦左右ふ仰て。
遠慮の人ハ。いまだ。ことの国の掟をまつらぬ。驚ことぐらぬ。驚ことぐらぬと禁ふ。

亦愛恵兵衛ふ宣へり。先生道家の説を唱へて彼此の國信を諭るゞら。朕ふ問ゞて教えざる。朕も又老荘の説を取らざるふ知あらぶ只ふくハ好ざるのミ。凡老荘家ハ仁義礼智信の五常をりて。先儒の迹とて只其自然ふ因るれバ。礼節ふ拘らざ。寓言をるのとて。玄牝の門ふ捨べ。夫形もなく。彩もなく。逆ふとるく。違ふとるく。舞ふとる居て動らべ。静ふて。変ぜぶ。かの言の成るゞ。内虚るゞ。外ふ形を見ざといふ。これ道家の肯とる所ゞ。是を名づけて玄牝といふ。その辨理あるふ似られども。尋くハ人間ふ用るゝ。りゝその妻和をりて本體とするこれハ。彩を埋め。光を包ミ。いハゞ塗らぶ。てあゞ。ふ軽薄墮弱のり。動されバ。言を老荘は侘ゝ彩状を故ゝ。彼を誉。これを罵て。子ゝ角の辨をこのミ人ふ捨られ。世ふ捨られて。一生涯を悔をちらぶ。これ彼老荘家といふりを見るふ。尋くハ老荘の

質物ふて。真の老荘家ハ稀るゝ。ゞ國ハ由とあつて。先王の道を改めゞ。朕祚を兼ーたゞめゝ。堯舜大禹。成湯。文武の迹を慕ひて。その迹を踐ミ。その改を約くゞ。大臣有司ホも。又皐陶伊尹周公の迹を慕ひ其迹ふ入て。朕を佐ざといふ王ゞ。ゞ衆りて國人ホも。又良民の迹を慕ひ。その迹をのこあて。奸悪不善をるとりの。夫仁義礼智。孝悌忠信ハ。こゝ聖人の所低る是ゞ。聖人既ふ没ーて。只その迹とくこ是をとゞ。五常ハ約を除て去るとれハ。万民慾を忘ふて恩を忘れ。恥を去らぶ。狐狸の魅とゞ。虎狼の吟ふゞ。智あるハ愚るを欺き。強きハ弱れを拉ぎ。亦彼鷹鷂の類を教さゞ。蚩蜂の人を蠆ゞ。螫ふ禁ざるふ。ようゞ。祀ゝこの紫山子を捨て。ゝく鳥を追ふりのあらんや。ゝるふ虚子をるむりのハ。仁義と聖王先儒の迹とて取ゞ。只自然ふ因るを説のミ。説と

いくども行ふものの稀なるゆゑ。用ひらるゝ。仁義の罪人と
なるゝなんぬいと愚なる所為なるべし。譬ば法帖は。古人の手の跡なり。
まねれども後人こゝに死習ふとなれば。その皮骨ふ入るものまれ。儒道も又
如此なり。こゝを聖人の迹といふとも。学べばその道を極めて。聖人の皮骨
ふ入るなんぞ。ひとゝ聖人の迹を学ひ。聖人の迹を作くゝ。聖人の迹を乗ゝ。先生ゝ
雑説と楽ゝ。ゝ管ふ雑説を乗ゝ。その説ところ。儒あもあらば。仏あもあらば。ゝ聲家
を威ゝ死りて楽ゝ。その楽ゝ。いづれ。大約雑説を好むもの。
人を誹ざれば乗ゝ。膂力あるものは難ふ臨ざれば乗ゝ。陣法をゝくゝるもの
は。殘ざれば乗ゝ。智あるものは。心慮を費ざれば乗ゝ。その乗ゝとする所有用
のものふ似たれども。その弊ゝ。ゝ弊とする所ゝ。智恵あるといふとも。好
て思慮を費ゝ。ゝ慮は跌き。雑説を好といふとも。人を誹ゝ。ゝ德を傷り。膂力

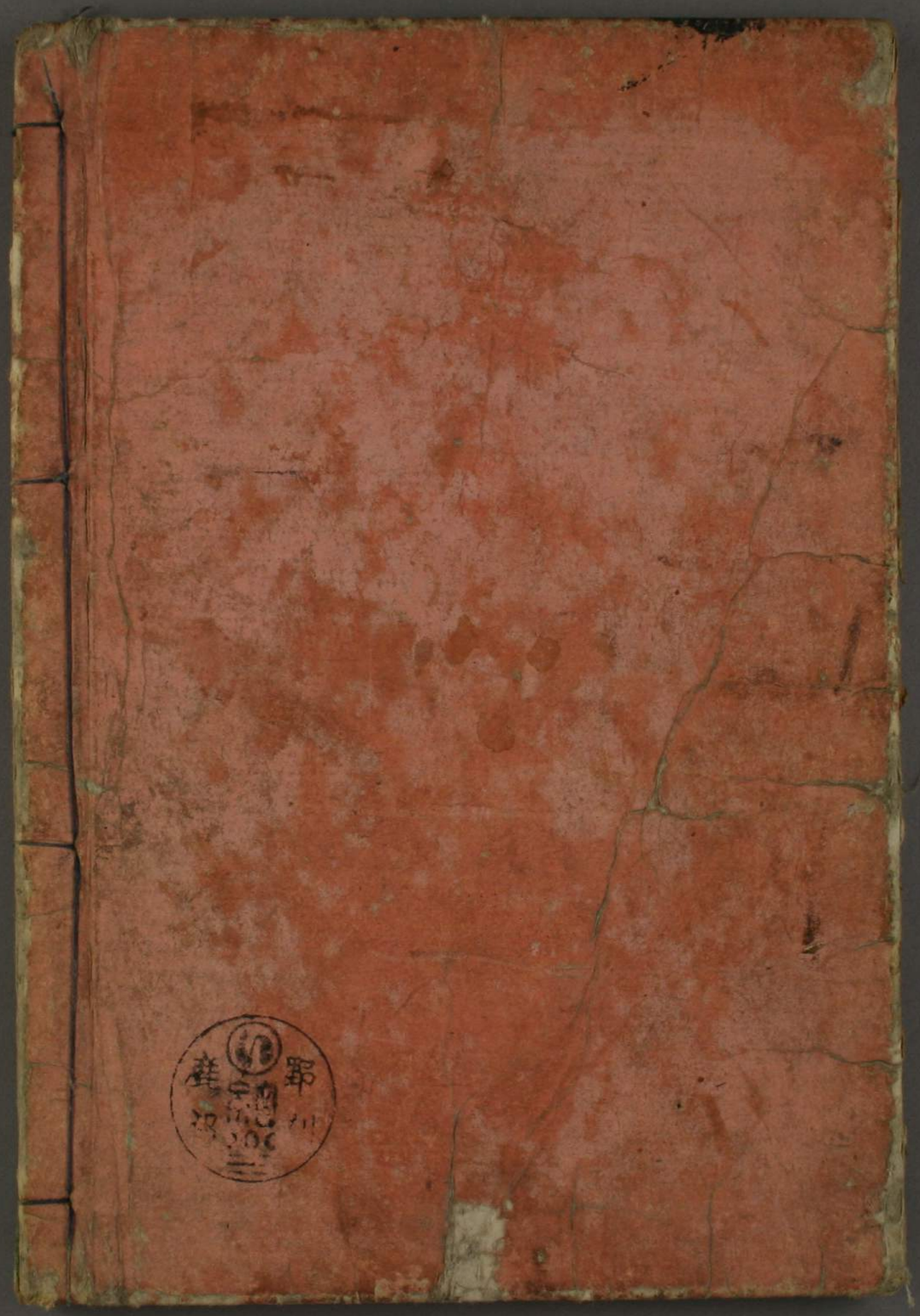
あるといふとも。難ふ臨むゝ。ゝ慮は危く。陣法をゝくゝといふとも。殘ば必危し。かく
のごとくなる。ゝ慮は。楽ゝ。ゝ慮ふ人ゝ。ゝ慮は人乗ゝ。乗ゝは稀ゝ。危きを乗ゝは
まれなり。乗ゝて危きを忘れは。時慾ゝ。ゝ慮ふ人の世の為なれば。獵漁ゝ教生て
楽むものは。深山ふ入り。大澤ふ臨み。風波を犯せども。身の危ゝを忘れ。糸竹
を楽むものは。艶曲ふ心浸ゝて。家業の化ふるゝを忘れ。風流を乗むものは。
花ふ折び月ふ嘯き。詩ふ凝り。歌ふ耽りて。月日のいつぐふふるゝを忘れ。古
器古書画をあつめて乗むものは。獲ぐ死の財を貴びて。用ゆる所ゝを忘れ
ざ。金銭を積むゝを乗むものは。貪る欲ゝ。煩悩の絶ぬを歎ゝ。
好色ゝて乗むものは。産を破るゝを忘れ。盗ゝて乗むものは。首の地ふ落る
を忘れざ。ゝ是を名て慾界の乗ゝといふ。ゝ情慾のゝを所。自我の乗ゝ。
あゝ。君子は道ふ乗ゝ。小人は数ふ乗ゝ。孔子は仁義を乗ゝ。老子は

虚無を楽しむ。釋迦は寂滅を楽しむ墨子は儉楊子は愛を楽む。その楽又いく流あり。なのがれてもるべくぶたといへども。古人の楽むところをもの稀なり。李斯は秦の悪を佐ることを楽む。趙高は君を賊することを楽む。王莽は邪を楽む。蔡邕は癈疾を食ふことを楽む。艾子はよく忘ることを楽む。王之猷は竹を植ることを楽む。陶弘景は松風を楽む。林和靖は鶴を放ちて琴を楽む。毛宝は亀を放ちことを楽む。杜甫と李白は詩を楽む。人麿赤人は和歌を楽む。杜預は左傳を注することを楽む。契沖は万葉を解することを楽む。長明は居を楽む。元政は鶉を楽む。人の楽む量なれども。悪を楽むものは善を楽むものよりまさる。詩歌を楽むものは経済を楽むものよりまさる。風流を楽むものは閑雅を楽むものよりまさる。危を楽むものは安きを楽むものよりまさる。

いふとは。そもそもかくる雲もなく。子孫孝順にして。家ふ矢折なく。織さく衣耕して食ふことを人間最上の楽といふべし。かくる楽をもとせざ。きを好む。酒を酌くを楽とするもあるも。不忠不孝不義をして。家を追れて家を失ひ負債を債らはしてふ。苦しさふ。ろくらぬ所行をあらぶ。妻子を愧を遺すものあり。親を欺き又他を欺き。ようづ偽りて。酒と彩金のぎて債ふるくとはちうるのぐら。情慾のもるかさのさふ。只一夜ふ半ひ失ひて。ことを楽とするとはたはその楽をいづくあるる。進えて退くことをいざるものは。暴虎馮河の楽をふ死をかくる人とは。兼好法師も いはざや。神社仏閣をのどく詣るふ。祭礼會日をいふ楽らぬもは。群集の中ふ。醉狂のものあり。老人女子は殊さらふ。ころ正べきことをるふ。信心うちに癖ろのもは。神仏へ参ることを楽と称して。祭の霄宮。会日を肩とし。大々の三も

那一紙をぢありて人ふ相結ふものゝ。その側ふ人ゐる死ゐを伺ひ閑室ふ入
てゝそゝ。そふゝ紙ふのを吹ゆるふ神仏へ新るゆさんとて糸清麦を日をえらび
群集ふ押ふて。ゐるもあるべ。懐の物をそゝれ〻とて念ぜざるも念〻ゐ
しろ。神明仏陀の著明ゐるも。投る塞残ふ目面ゐべるゝて凡夫の所為の
数多けふ吹ゆゝ。ゝ。迷惑ゐるべ。ゐるとゐへ神清も。寺糸ゐも危
きを忘ふて。安ふ紙求め。信心を假托ふ乗ふを取るゆゝ。ゐゝへゐれど牙の
乗紙皆とゝても。神へ清。仏へ糸ゐらんとゐゝふ滅又その中へ銭ゐるふ。
禍を捨ゐて福ゐ〻ゆふ。神仏の擁護もあるべけふど僅ふ二三十の沈魚王徐
魚ゐんどを殺らんとて。え舷を漕越さて風波の難を忘ふ。四五舛の蛤蜊を
嗚んとゝ。五里の千浮ふ口ゐ暮ら一銭の菌一袋の果を拾ふんとて野山
ふゐさゐて猛獣の牙ふゐけらふんとを忘ゝへ只嗜慾の乗ふ命を惜ま

ざるゆゝ。ゐふゝ極めて危しとゝ。ゐるも幸ふ〻て脱ゝ工もあるべ。
或ハ財を好ふ利を索て貪ふ。飽工を忘ふ。邪智を逞して法を犯
人を逝て罪せられ。或ハ淫酒の為ふ父祖相伝の家業を失ひ。むゝ〻の側ふ
ゐる。九尺二間の棟割ふ。布ふぬ古席蓆布て起臥ふれど一
外采ハ。ふかふ買ゐねて客ゐると死ハ隣ゐら茶を乞ゐて間を合せ紙の
蒲団ふ寒ゝ夜を凌ぎゐ。紙のふゐふ夏虫の蚊を防げども悩を悩とゐ悔
もせざ。この牙ふゐゝゐゐゐ死。柳巷の乗ふ花をさゐも頃城ゐゐひふ駿の
財を遣ひ失ひ。一生の汚ゝとゝそゝふゐれ人ハ代名ハ未代碗久紀文の名
ハ高ゝと慕ゝゐ放蕩ゐゐの。慕ゐて生涯嘆ぶぬも世ふハ折ふゐり
と吹く。過て改ふ悼るゝゐる死ゐのゝ。その過をゐゐつも負情ゝて理
を非ふ曲げゝかゝぬ名を求ゐハ大申が乗ゝと同日の論ゐるべ。凡乗とゐゝ

産業組合図書館

りめへ求めて来るくりのみへあるべ。まろるふ来ることを求るりのへ。是処の花見
被処の月見。某月某日と日とトて友こち両三人豫てその日を契りよる
ば。一人へ障るエありとて。両三日以前より。ゆびといふ又一人へ俄頃より風の
こちそそうち臥しよう。同伴三人ば中メキ下天へ缺よけまどかくまぞろひさち
るりのを。何日まぞる待べき。翌日人と。ろふ。の仇さと。夜いあじの吹ぬ
りのへ。ようやまぶ。ひとつるりとも。ゆえて月人とろく。甲夜より奴婢をさそ
ば。偏提茶辯當の准備をる。狂よ天の気色夜のうちふ変りでその暁方
より。両いろく降そば。終日雨間あふざれば。ひとり寝ようちて怒をうつし。
園宅のりのを叱りくびさ。辯當をりち腐ととと。一生涯ふへ。五度も七度
もあるべ。三そのまをを求るなよ。まぞ乗ばて。衰の求ると速し。西行上
人の奇か。